

テーマ	FLS データベースにおける情報共有		
執筆者の 所属と職種 および氏名	新潟リハビリテーション病院 整形外科 医師 山本智章	執筆年月 日	2026 年 6 月 20 日
<ポイント> ● FLS では、多職種が患者情報を共有できるデータベースの構築が質の高い二次性骨折予防の基盤となる。 ● 患者情報を一元管理することで、評価・治療・フォローアップを切れ目なく実施できる。 ● データベースは患者管理だけでなく、KPI の可視化や多職種カンファレンス、診療の質改善（PDCA）のための重要なツールとなる。 ● 個人情報保護や適切な情報管理を徹底しながら、患者・家族との情報共有にも活用することが重要である。			
<本文> 骨折リエゾンサービス（Fracture Liaison Service：FLS）は、多職種が連携して脆弱性骨折患者の骨粗鬆症診療を支援し、二次性骨折を予防する医療システムである。その円滑な運営には、多職種間で必要な情報を適切なタイミングで共有できるデータベースの整備が欠かせない。 FLS データベースには、患者基本情報、骨折部位、既往歴・併存疾患、骨密度検査結果、血液検査所見、骨粗鬆症治療歴および現在の処方内容に加え、転倒リスク評価、栄養状態、リハビリテーションの実施状況などを登録する。これらの情報を一元管理することで、医師、看護師、薬剤師、リハビリテーションスタッフ、管理栄養士などの多職種が共通の情報をもとに診療を行うことができ、一貫した評価と介入が可能となる。 情報共有において特に重要なのは、患者の診療経過を可視化することである。例えば、骨粗鬆症の評価が未実施の患者や薬物治療が開始されていない患者、定期受診が途絶えている患者を一覧で把握できる仕組みを構築することで、FLS コーディネーターや骨粗鬆症マネージャーが早期に介入し、必要な対応を行うことができる。また、退院後の診療状況や骨粗鬆症治療の継続状況を継続的に把握することも重要で、外来受診状況や治療継続率、二次性骨折の有無などを追跡して、切れ目のないフォローアップ体制を構築することができる。さらに、データベースは施設全体の診療の質を評価するためのツールとしても有用である。多職種カンファレンスでは、データをもとに診療上の課題を明確にし、改善策を検討できる。一方で、データベース運用にあたっては個人情報保護への十分な配慮が必要である。施設内で適切なアクセス管理を行うとともに、研究や学会発表に利用する際には匿名化を徹底し、関連する法令や倫理指針を遵守しなければならない。 情報共有は医療スタッフ間にとどまるものではない。患者や家族に対しても二次性骨折予防の重要性を分かりやすく伝え、自己管理を支援することが重要である。各種の「骨折予防手帳」などのツールを活用することで、患者自身が治療経過を把握し、継続的な治療や生活習慣の改善に主体的に取り組みやすくなる。このように、FLS データベースは単なる情報の蓄積ではなく、多職種連携を支え、患者管理と診療の質改善を実現するための基盤である。適切な情報共有体制を構築することは、骨粗鬆症診療の質向上、二次性骨折予防の推進、さらには患者の健康寿命の延伸に大きく貢献する。			

<事例>

情報共有活用例

2012年に新潟リハビリテーション病院では大腿骨近位部骨折患者にFLSを導入し、オリジナル「再骨折予防手帳」を作成し活用することで職種間の情報共有と患者家族への啓発や教育が円滑に進んだ。その結果、治療開始率および治療継続率の改善につながった。日本脆弱性骨折ネットワークの大腿骨近位部骨折患者データベースに参加し、追跡データを共有して治療の質向上に役立てている。

参考資料

1. Hagino H, Wada T. *Osteoporosis liaison service in Japan*. Osteoporos Sarcopenia. 2019;5(3):65-68.
2. Suzuki A. *Multidisciplinary approach to management of osteoporosis with osteoporosis liaison service (OLS)*. Endocr J. 2023;70(5):459-464.

COI

なし（必要に応じて記載）